園 長 だ よ り NO１０６

2024.10.30

食 欲 の 秋

食欲の秋、スポーツの秋、秋らしい陽気を感じられる日があります。この時期から身体を使い遊ぶことがより活発になってきます。良く動き遊ぶことで食欲も旺盛になります。

特に５歳児クラスは給食の際、おかわりをする姿が顕著にみられます。当然、「えーもうないの！」という声が聞かれることも度々、どの子にも満腹になるほど提供したいと思ってはいますが充てられる費用は決まっています。なんとかやりくりをして翌月より子ども達の好きなメニューを増量することにしました。　ちなみに鶏のから揚げ・カレーライス・麺類の提供日になります。各年齢、毎食ごとの喫食状況（残量含）などを精査して、５歳児について試行として対応致します。

もうすぐ小学校

あと 5 か月、まだまだ時間はあると考えてもいいものですが子ども達との生活は本当に速く進んでいきます。まだまだと考えていても日々、充実した生活を送ると桜の花が咲く４月はもう近くまで来ていると感じます。

１０月から始まった就学時前健診、子ども達は就学する小学校へ行き健診を受け、小学校の入学に備えるわけです。

小学校・幼稚園・保育園では保・幼・小連絡協議会というものがあります。

近隣の小学校との連携をはかり園と小学校が共に子ども(子ども達)を育てていく教育の在り方について様々な面から考えていく機関です。年に数回ではありますが参観及び協議をする場を設けています。協議会での関係性の構築をもとに地域での連携、情報共有を行っています。

子どもの伸びしろを広げるために積極的に人的な連携や交流をはかっています。

小学校の先生とお話をする中で就学に向けて「就学までにどんなことができたらいいでしょうか？」という問いが毎年の話題で出てきます。何事も完璧にできなくていいのです。学校に就学するとちょっとのことでつまずく場面があることを想定して保育園生活のなかで無理なく対応できるようにしていくことのヒントをいただきます。例えば靴を履くとき、保育園では座って靴を履くことが大半です。座ることで自分の足元を直視して履けたことを確認できることやそれぞれの技量で時間をかけ丁寧に履けることから自然な姿です。ただ小学校では靴箱から靴を取り出し立って履くことが望まれます。　このちょっとしたことが子どもによってはちょっとではすまされないこともあるのです。着替えにしても学校では限られた時間で着替えて身の回りの始末をすることが望まれます。園生活では着替えをする習慣はありますが個々のペースで行うことが基本になります。　焦らせたりせずに取り組んでいきます。

靴を履くこと、着替えをすること、この２点とも概ねできるようになり卒園しますが環境が変わると戸惑う事があることを念頭におき、無理がないように今後、子ども達と取り組んでいくことが大切と思っています。

子どもの特性を理解すること

園では子どもの興味・関心に応じて遊びや活動を支援する個別援助を大切にしていますが小学校は教科による一斉の指導が行われます。授業時間、時間割も決められています。チャイムにより時間が区切られている。こうした教育内容や方法も保育園とは異なる大きな違いです。　ただ、このよう内容・方法をとっていることは子ども達の発達の特性に応じたものと考えることができます。

幼児期は自己中心性が顕著にみられる時期自分の興味・関心があることなら必然的に夢中になることができる。遊びに没頭したり、しっかりと他者の話を聞くことができる。小学校の授業 2 コマ分ぐらいは余裕で遊んでいられる。ただ関心のないことの話は聞かないことや落ち着きのない姿を見せることもあります。

5 歳児になると自己中心的な姿がやわらぎ、他者の気持ちを察し、仲間とのかかわりでも自分の感情や行動を抑えることが徐々にできるようになってきます。セルフコントロールを仲間（他者）との関係性の中で学んでいきます。　5 歳児では仲間と共に、知恵を出し合い、考えや思いを伝え合い活動に取り組む経験をしていきます。そのような積み上げから仲間と共に集団で行動し学んでいくことができるようになっていきます。　こうした成長が基盤にあり小学校では一斉指導が中心の教育が行われていると考えます。

幼児期は経験主義と言われるように経験と体験を通じて様々なことを学んでいきます。抽象的な言葉の理解は不十分です。ただ 5 歳児頃になると言葉で聞いたことを頭の中で思考できるようになってきます。自分（仲間）で考え、調べ、その言葉を具体的にわかる、知ろうとする姿も見られます。そのような特性から学校教育へ移行することが可能になると考えられます。

ただ個々の発達は一律ではありません。個性や育ってきた環境により個人差が大きいことにも注意を向けなくてはなりません。

これから就学まで、いや就学後も小学校と連携をとり、ひとり、ひとりの子どもに不利益が生じないように配慮していくことが大切です。

（おおぞら保育園　園長　廣部信隆）